

著者紹介 (敬称略)

牧野暢男

パチンコ・パチスロ遊技障害研究会・研究会長。日本女子大学名誉教授、社会学、教育社会学

佐藤 拓

成瀬メンタルクリニック院長精神科学(嗜癖問題)、医学博士

西村直之

認定NPO法人リカバリーサポート・ネットワーク代表理事、(社)JSRG代表理事、精神科医、医学博士

篠原菊紀

公立諏訪東京理科大学工学部応用情報工学科教授、医療介護健康工学部門長。応用健康科学、脳科学。コンテンツの快感を量的に予測する研究、機械学習による「らしさ」研究

石田 仁

日工組社会安全研究財団主任研究員。博士(社会学)。専門社会調査士。社会調査からウェブ調査まで幅広く手がける

坂元 章

お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系教授。博士(社会学)。社会心理学を専攻し、メディア使用の影響に関する研究に従事してきた

河本泰信

医療法人正心会よしの病院副院長。一般財団法人ギャンブル依存症予防回復支援センター顧問。嗜癖精神医学を専門とする

社安研 遊技障害研究の最終報告書

予防対策を具体的に提案

実態把握に3つの新測定尺度使用

冊子のほかHPにも

間の調査研究をまとめたもの。

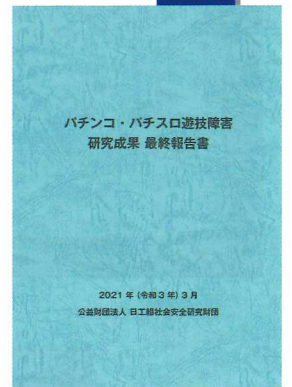
公益財団法人日工組社会安全研究財団(社安研、椎橋隆幸会長)は3月、「パチンコ・パチスロ遊技障害研究成果最終報告書」を発表した。報告書は冊子の他、ホームページでもPDF版がダウンロード用にアップされている。

同書は社安研に設置された「パチンコ・パチスロ遊技障害研究会」が、パチンコ・パチスロに起因する遊技障害の実態把握とその原因の究明、さらに遊技障害の予防・介入・治療方策の検討などを目的に2013年から21年までの約8年

間の調査研究をまとめたもの。

これまで国内専門誌に15編、海外専門誌に5編の論文を発表するとともに、18年3月には「パチンコ・パチスロ遊技障害全国調査調査報告書」、20年2月には「パチンコ・パチスロ遊技障害研究成果中間報告書」、さらに翻訳書としてドイツ・リチャード、アレック・ブラッチンスキー、リア・ノーワー編著、西村直之監訳の「ワイリー・ブラックウエル ギャンブリング障害ハンドブック」を発行するなど多くの成果を残している。

また、遊技障害の実態把握のため「実践的な調査研究ツール」として「パチンコ・パチスロ遊技障害尺度(PPDS)」や「パチンコ・パチスロ両価値尺度(PAS)」や「認知の歪み尺度」という3つの測定尺度を新たに開発し、それらを使った調査研究を実施。



14年、厚労省研究班の調査報告をもとに「病的賭博の恐れのある人が国内推計530万人」と報道された際には、新指標のPPDSを使って社会調査を行い、直近1年において遊技障害のおそれのある人の推計値が約40万人であることを算出し発表するなど、社会の誤解を解く役割も担ってきた。

今回発表された最終報告書は全8章。冒頭のエグゼクティブ・サマリーに続いて「第1章ギャンブリング問題のとらえ方の変化と進むべき方向性について」「第2章なぜパチンコ・パチスロ遊技障害の研究が必要なのか」「第3章全国の遊技人口および遊技者の実態」「第4章パチンコ・パチスロ遊技障害尺度(PPDS)の開発とカットオフ値の設定」「第5章遊技障害のおそれのある人はどの程度いるか」「第6章障害うたがい該当者の性格的・心理的特徴と介入法」「第7章予防や早期介入のためにI『遊

技障害のおそれのある人」と臨床例等との乖離と予防についてII世界の対策の潮流から」「第8章調査結果の総括と今後の研究への課題と展望」という構成になっている。

報告書では、遊技障害と強い関係をもつ要因について「パチンコ・パチスロのための現在の借金」「パチンコ・パチスロのための債務整理体験」「月の負け額」、また遊技障害のリスクを下げるものとして「勝ち負けにかかわらず上限に達したら遊技を控える」「自由時間以外に遊技をしない」の合計5項目を指摘。さらに、パーソナリティ要因としては、神経症傾向で特に不安や抑うつ、衝動性、ストレスが強い影響を及ぼすとした。

一方、予防対策の必要性を強調し、特に遊技をする人たちに対して「自由に遊べる時間で遊びましょう」というメッセージを伝えることが重要だとしたうえで、個人のパーソナリティ特性などによる遊技障害の高リスク群があることが明らかになったことから、その特定層に対して健全な遊技の必要性を呼び掛ける仕組みをつくるべきとするなど、具体的な提案を行っている。